音楽文化を通して見たナショナル・アイデンティティー：シンガポールの事例

石　井　由　理

National Identity through Music: A case of Singapore

ISHII Yuri

（Received September 30, 2016）

はじめに

グローバル化時代といわれる現代、多くの国々が、国際社会に参加できる国民を育成しようと試みる一方で、自国の人々を結びつけるナショナル・アイデンティティーの意識を高めようともしている。グローバル化のこのような影響は音楽教育にも反映されており、多くのアジアの国々では、西洋音楽理論を音楽の普遍的な基本原理であると認識して学校で教えているのと同時に、自国音楽文化の独自性を維持するために自国の伝統音楽を教えたり、愛国的な歌詞の歌を教えたりもしている。筆者の関心は、このような現象の中で、結果として人々がどのような音楽文化を形成するのかという点にある。この問いに、多様な人々との共生、普遍的なグローバル・スタンダードの獲得、ナショナル・アイデンティティー強調の必要性といった観点から接近するため、本稿ではその手段としてシンガポールに着目する。はじめにシンガポールの社会的背景と音楽教育について簡潔に述べたのちに、シンガポールの大学生と現職教員を対象に行った小規模なアンケートの結果に基づき、彼らの回答に反映されたナショナル・アイデンティティーと普遍的な音楽文化、それらに対する国家の影響について論じる。

社会的背景と音楽教育

シンガポールは1965年にマレーシア連邦から独立した。しかしそれはシンガポールのリーダーたちが望んでのことではなく、マレーシア連邦にとどまりたいという彼らの意思に反して分離された結果としての独立であった。独立が決定した際に、シンガポール建国の父と呼ばれるリー・クワンユーが流した失望の涙は有名である。独立後のシンガポールには、国家としてのシンガポールのナショナリズムなどというものは存在しなかった。なぜならば「国民」の実態は中国、マレーシア、インドからの出稼ぎ労働者たちであり、彼らにとっては自分たちの母国は依然として中国、マレーシア、インドだったからである（Velayutham, 2007: 10）。シンガポールの国土もまた、独立国として生き延びるには小さすぎると言われていた。よってシンガポールは初めから世界に開かれた経済戦略を選択せざるを得なかったのである。

政府は「シンガポール人」たちの間に共有のナショナル・アイデンティティーを育てるべく努力をしてきたが、政府がどのようなアイデンティティーを掲げたかは、その時々のシンガポールのおかれた状況を反映して変化している。Velayutham（2007）に基づいてその変遷をまとめると以下のようになる。

独立後から1970年代まで

独立当初、政府は独立によってシンガポール人としての明確なアイデンティティーが生まれるものと期待していたが、やがてシンガポール国民の中に自分たちの達成した発展に対する誇りと裕福なシンガポールの国民としてのナショナル・アイデンティティーが育つように、経済的な発展に力を注ぐようになった。それと並行して、シンガポール国民を構成する主たる民族である中国系、マレー系、インド(タミル)系の各民族集団間の平等が最重要課題であるとした。

1980年代

政府はシンガポール国民が過度に西洋化することに対する危惧をもつようになった。しかし、シンガポールにおいて植民地時代のイギリスが持ち込んだ西洋的な文化や価値観とバランスを取るためにそれ以外の要素を強調しようとすると、中国、マレー、インドの各民族集団が継承してきた文化・価値観へと分化してしまう恐れがある。そのため、これらをまとめる概念として「アジア」の価値観が強調されるようになり、アジアのアイデンティティーが重視されるようになった。初めのうちはアジアの伝統的アイデンティティーが追及されるなど過去志向的であったが、しだいに未来志向的な「新しいアジア」のアイデンティティーが求められるようになる。「新しいアジア」のアイデンティティーとは、近代性を自身のアイデンティティーの一部とする一方でアジアの文化的伝統との強いつながりを強調するものであり、アジアの達成した近代性を西洋の近代性に伍するものととらえる考え方である。

1990年代から現在まで

1990年代に入ると、シンガポールは世界を自身の後背地として取り込む必要性があることを認識し、政府の目指すナショナル・アイデンティティーは「アジア的で近代的」であることから「グローバルでコスモポリタン」であることへと変化した。

この変遷は学校における音楽教育にも反映されている。Chong（1991: 47）によれば、国家建設の初期には、音楽は小・中学校のカリキュラムの中の「outer subject」（外側の教科）という位置づけであり、政府は音楽のもつ「強力な結合力」に期待し、「国歌」に加えてマレー、中国、インドそしてイギリスの音楽を教えるように奨励した。しかし、現実の教室で行われた音楽教育は決してその通りにはいかず、実際には西洋音楽、特にイギリスの歌曲が教えられることの方が圧倒的に多かったということである。

1970年代になると国民の結束をより強固にすべくナショナル・ソングスが導入され、建国記念日に演奏されるようになった。公式の音楽シラバスも用意され、その中にマレー語、中国語、タミル語、英語の歌から成る推奨曲リストが加えられたが、教師たちには依然として自分にとって馴染みのない曲は避ける傾向が見られた(Chong, 1991; p. 57)。馴染みのない曲とは、教師自身が属する民族の曲および英語曲以外の、他民族、他言語の曲や歌である。

さらにChong（1991）の研究によれば、1980年代になると音楽は「core subject」（中心教科）の一つとなり、1982年にはより主体的に音楽を作り出す音楽教育を目指そうとthe Active Approach to Music Making Programme が開始されたが、小学校教員はそれを実践するための十分な教育を受けていなかったため、あまり効果的ではなかったようである。また、政府が音楽に対して抱いている、子どもたちが音楽を通してお互いの文化の特徴を尊重することを学ぶという期待は、1984年にシンガポールの歌を広めるためのSing Singapore Festival, 1988年の

Sing Singapore Song Bookという形で導入されたが、シラバスでは中国語、マレー語、タミル語、英語の４言語が強調されている一方で、音楽自体はこれらの民族の曲でさえ、西洋音楽のリズムと調性で掲載されていた（Chong, 1991）。つまり政府にとっての音楽における「アジアのアイデンティティー」とは、決してそれぞれの民族集団の継承してきた音楽の音を正確に伝承することではなく、それらの民族の文化を尊重する姿勢を示すとともに、西洋の音楽を普遍的な基本原理としてそれに基づいてアジアの音楽を学ぶことであった。このように、「アジアのアイデンティティー」を強調すると同時に世界の普遍的な音楽原理として西洋の音楽原理を学ばせるという二つのことは、政府にとっては矛盾するものではなかったのである。普遍的な音楽原理を学ぶことは、1990年代に入ると一層その重要性を増してくることになる。

1991年、政府はシンガポールをグローバル・シティーに転換していくための戦略を発表した（Velayutham, 2007: 77）。音楽に関する面では、ポップ、ロックも含んだ西洋の有名な音楽家の演奏会やミュージカルを誘致することによってアジアからの観光客を引き寄せるという、芸術のもつ経済的可能性が認識された（Kong, 1999）。この政策は学校での音楽教育にも反映されており、西洋クラシックに加えて西洋のポップスやロック、ミュージカルや映画などの音楽産業から生まれた作品が教科書中の大きな位置を占めている。つまり音楽の重要性はシンガポール経済の中で新たに認識された経済の伸びしろとしての可能性にあり、世界、特にアジアの近隣諸国の人々が、わざわざシンガポールにやって来てまで聴きたいと思うようなパフォーマンスを提供するために、何がそのようなパフォーマンスなのかを見極める音楽的センスのある人材、あるいは自らそのような音楽を創造できる人材を育成することが、重要課題となる。シンガポール経済のグローバルな展開のためには、シンガポールの民族性にこだわった過去志向のアイデンティティーではなく、過去にとらわれることなくあらゆる音楽を受け入れて発展していくコスモポリタンとしての未来志向のアイデンティティーが求められるようになったのである。

1997年はシンガポールにとって教育課程の大改革の年であった（Gopinathan & Mardiana, 2013: 26）。その一環として国民教育（National Education）と呼ばれる政策が導入され、音楽を含む学校教育のあらゆる場面で展開されることとなった。しかしこの政策は当時の副首相によって突然決められた、国民不在のトップダウンの国民教育であるとも言われている（Gopinathan & Mardiana, 2013: 36; 74）。コスモポリタンとしてのナショナル・アイデンティティーは、もはや過去の民族的伝統よりも、英語をはじめとするイギリス植民地時代から引き継いだ遺産を生かしてグローバルに活躍することに価値を見出すようになってきているが、皮肉なことに、コスモポリタンになったがゆえにより快適な新天地を求めてシンガポールを去る世代も生まれている（Ortmann, 2009: 34-35; Velayutham, 2007）。

以上、政府によるシンガポールのナショナル・アイデンティティー形成の努力の変遷を音楽教育の観点から概観してきた。次に、このような政策のもとで育ってきたシンガポールの人々が、現実にはどのような音楽にナショナル・アイデンティティーを見出しているのかを、現地で実施したアンケート調査に基づいて見ていくこととする。

アンケート調査

アンケートは筆者が既に日本、タイ、台湾で実施した同様の調査との比較を前提に、実施方法、質問項目を踏襲して実施した。実施したのは2014年３月で、調査対象はシンガポールの教員養成大学の学部生11名および現職研修に参加していた小学校教員18名である。両者とも音楽

専科の教員ではなく、自身が担当する３教科のうちのひとつとして音楽を選択した人々である。（日本の小学校教員のように全教科を担任が教えるのではなく、各教員が３つの教科を担当する。）質問項目は、筆者が過去に行った日本の学習指導要領の調査から抽出した表現に基づき、「シンガポールの音楽」「我が国の音楽」「郷土の音楽」の各項目から連想する曲名をそれぞれ10曲以内で回答するものである。また、日常生活の中で実際に回答者が聞いている曲はどのような音楽かを知るために、「好きな音楽・よく聞く音楽」という項目も設けて、同様に10曲以内で回答を求めた。回答の際には、回答者相互で相談することはしないように指示し、回答者が知っている範囲で作曲者名、演奏者名、曲のジャンルも記入してもらった。これらは後日筆者自身が文献等を用いて確認している。回答は自由連想なので、もし各項目が同じ意味だと解釈すれば回答は同じものになる可能性もあるが、本研究ではこれらのことばを回答者がどう解釈するかも重要な観点の一つとなっている。回答者自身の情報としては、年齢、性別、民族、小・中学校時代に何語で教育を受けたかのほか、回答に影響を与えたかもしれない特殊な経験や事項を記入してもらった。以下にアンケートの結果を示す。なお、表１－６中のグレーの曲は、各質問への大学生と現教職員の回答に共通する曲である。

（１）大学生の回答

はじめに「シンガポールの音楽」「我が国の音楽」「郷土の音楽」の３項目に対する大学生の回答を見ていく。大学生は全員中国系シンガポール人であり、年齢は21歳から26歳である。

全体的な特徴としては、３項目に対する回答の多くが重複していたということがあげられる。「シンガポールの音楽」に回答された曲のうち９曲は他の２項目でも挙げられたほか、「シンガポールの音楽」と「我が国の音楽」の２項目で重複したのは１曲、「郷土の音楽」と重複したのが２曲、「我が国の音楽」と「郷土の音楽」で重複したのが３曲あった。さらに回答の大多数はいずれの項目においても国のシラバスのリストにある曲、ナショナル・デイの曲、シング・シンガポール・プログラムの曲、ミレニアム祝典曲など、何らかの形で公的な性格のある曲であった。

３項目に共通して上位１位もしくは２位に入ったのが、シンガポールを代表する大衆音楽歌手・作曲家であるディック・リーが作曲し、ナショナル・デイ・ソングに選ばれた「Home」である。「シンガポールの音楽」への回答で「Home」と同数の７回答を得たのは「Fried Rice Paradise」と「細水長流」であるが、このうち「Fried Rice Paradise」は同じくディック・リーの作品で、ミュージカルにもなっている。「細水長流」は、1980年代に梁文福らがシンガポールの音楽として始めた中国語フォークソングである新謡（文字通りシンガポールの歌という意味）というジャンルに属する曲である。「細水長流」は音楽のシラバスに掲載されているが、「Fried Rice Paradise」に関しては公的な性格のものには含まれていない。その理由については後述する。「我が国の音楽」としては「細水長流」が１回答を得たのみで、「Fried Rice Paradise」ともどもあまり「我が国の音楽」として相応しいとは思われていないようであるが、「郷土の音楽」としては「Fried Rice Paradise」は４回答を得て「Home」に次いで２位、「細水長流」は２名の回答となっている。

これら３曲の次に「シンガポールの音楽」として６回答があったのは「Semoga Bahagia」というマレー語の曲で、国歌と同じZubir Saidの作品である。この曲は「我が国の音楽」でも３人が回答したが、「郷土の音楽」としては１人が回答したのみである。「Di Tanjung Katong」もシンガポールのマレー語曲であるが、こちらは「シンガポールの音楽」のみに４人

が回答している。他にも元はインドネシア民謡のマレー語の曲「Chan Mali Chan」が２名によって回答されている。また、この項目で３回答があった２曲のうち、「Munnaeru Vaalibaa」はタミル語の曲である。これらから、中国系シンガポール人の学生回答者たちが、「シンガポールの音楽」の構成要素としてマレー語とタミル語の曲が欠かせないと考える傾向があることが伺える。

同様の傾向は「我が国の音楽」の回答にも見出すことができる。１位は国歌である「Majulah Singapore」というもともとマレー語の曲であるが、それは独立の経緯からマレー語がナショナル・ランゲージとされたためである。先述の「Home」（6回答）のほか、上位には「Munnaeru Vaalibaa」（４回答）、「Semoga Bahagia」（３回答）があげられており、「我が国の音楽」としてもマレー語とタミル語の曲を入れる傾向がある。しかし「郷土の音楽」となると、回答者全員が中国系であった学生の回答では、マレー語およびタミル語の曲は国歌を除けば「Chan Mali Chan」、「Semoga Bahagia」、「Munnaeru Vaalibaa」がそれぞれ１回答ずつのみであり、前２項目ほどには３民族の曲を取り混ぜて回答しようとする意識は感じられない。また、「郷土の音楽」への回答には他の２項目と比べて公的な位置づけのない曲が多く、「シンガポールの音楽」で３曲、「我が国の音楽」で２曲なのに対して「郷土の音楽」では９曲回答された。これらは西洋の童謡１曲を除いていずれも英語もしくは中国語ポップス系の曲で、シンガポール出身だが台湾を拠点としても活躍している孫燕姿や林俊傑の曲も含まれる。「郷土の音楽」には他の２項目と比べて回答が集中する曲の数が少なく、「Home」「Fried Rice Paradise」「Where I Belong」（Tanya Chua作曲のナショナル・デイ・ソング）の３曲以外にはあまり回答者に共有されている「郷土の音楽」の曲はないようである。

表１「シンガポールの音楽」大学生の回答

曲名	回答数	公的な位置づけ	備考
Fried Rice Paradise	7		シングリッシュポップス、ミュージカル
細水長流	7	シラバス	新謡
Home	7	シラバス、ナショナル・デイ・ソング	
Semoga Bahagia	6	シラバス	マレー語
Di Tanjung Katong	4	シラバス、Sing Singapore	マレー語
Singapore Town	3	シラバス、Sing Singapore	
Munnaeru Vaalibaa	3	シラバス、Sing Singapore	タミル語
Where I Belong	2	ナショナル・デイ・ソング	
Chan Mali Chan	2	シラバス、Sing Singapore	インドネシア(マレー)語
Count on Me Singapore	1	シラバス、ナショナル・デイ・ソング	
Moments of Magic	1	ミレニアム祝典テーマ	シンガポールポップス
Majulah Singapura	1	国歌	マレー語
What Do You See	1	シラバス、ナショナル・デイ・ソング	
Summertime	1		ジャズ
遇見	1		中国語ポップス
Purnama	1		シンガポール・ロック

表２「我が国の音楽」大学生の回答

曲名	回答数	公的な位置づけ	備考
Majulah Singapura	8	国歌	マレー語
Home	6	シラバス、ナショナル・デイ・ソング	
Munnaeru Vaalibaa	4	シラバス、Sing Singapore	タミル語
Where I Belong	4	ナショナル・デイ・ソング	
Singapore Town	3	シラバス、Sing Singapore	
Semoga Bahagia	3	シラバス	マレー語
Count on Me Singapore	2	シラバス、ナショナル・デイ・ソング	
One People One Nation One Singapore	2	ナショナル・デイ・ソング	
Reach Out for the Skies	2	シラバス、ナショナル・デイ・ソング	
We are Singapore	2	シラバス、Sing Singapore	
Stand Up for Singapore	1	シラバス、ナショナル・デイ・ソング、Sing Singapore	
Five Stars Arising	1	Sing Singapore	
Burung Kakak Dua	1	シラバス	インドネシア（マレー）語
細水長流	1	シラバス	新謡
Chan Mali Chan	1	シラバス、Sing Singapore	インドネシア（マレー）語
童謡	1	Sing Singapore	
Moments of Magic	1	ミレニアム祝典テーマ	
凍結	1		中国語ポップス
木乃伊	1		中国語ポップス

表３「郷土の音楽」大学生の回答

曲名	回答数	公的な位置づけ	備考
Home	6	シラバス、ナショナル・デイ・ソング	
Fried Rice Paradise	4		シングリッシュポップス・ミュージカル
Where I Belong	4	ナショナル・デイ・ソング	
Majulah Singapura	2	国歌	マレー語
細水長流	2	シラバス	新謡
Stand Up for Singapore	1	シラバス、ナショナル・デイ・ソング、Sing Singapore	
We Are Singapore	1	シラバス、Sing Singapore	
Count on Me Singapore	1	ナショナル・デイ・ソング	
Singapore Town	1	シラバス、Sing Singapore	
One People, One Nation, One Singapore	1	ナショナル・デイ・ソング	
Munnaeru Vaalibaa	1	シラバス、Sing Singapore	タミル語
Chan Mali Chan	1	シラバス、Sing Singapore	インドネシア(マレー）語
我住的地方	1		中国語ポップス
The Fa La La Song	1		カナダポップス
You Give Me Wings	1		シンガポール英語ポップス
Three Little Tigers	1		もとはフランス民謡
遇見	1		中国語ポップス
I Dream	1		シンガポール英語ポップス
一千年以后	1		中国語ポップス
愛拼才会赢	1		中国語ポップス
Semoga Bahagia	1	シラバス	マレー語
Is This Home?	1		Youtube　確認できず

（２）現職教員の回答

現職教員に対する調査では、18名の回答者のうち３人がマレー系で、１人がインドネシア人配偶者をもつ中国系であった。年齢は未記入の回答者も２名いるが、他は25歳から43歳までであり、未記入の２名もこの範囲から大きく外れるとは考えにくい。

全体的な特徴としては、大学生ほどではないが３項目に対する回答の多くが重複していたということがあげられる。12曲は全３項目で共通しており、これらは全てシラバス掲載曲であったりナショナル・デイ・ソングに選ばれた曲であったりなど、何らかの公的な位置づけがなされている曲であった。「シンガポールの音楽」と「我が国の音楽」の２項目で重複したのは３曲、「我が国の音楽」と「郷土の音楽」で重複したのが３曲あったが、「シンガポールの音楽」と「郷土の音楽」の２項目のみで重複する曲はなかった。また、「シンガポールの音楽」に回答された曲の約半数、「我が国の音楽」への回答曲の４分の３、「郷土の音楽」への回答曲の約半数が、何らかの形で公的な性格のある曲であった。

表４「シンガポールの音楽」現職教員の回答

曲目	回答数	公的位置づけ	備考
Fried Rice Paradise	13		シングリッシュポップス、ミュージカル
Home	6	シラバス、ナショナル・デイ・ソング	
細水長流	5	シラバス	新謡
Singapura	3	シラバス、Sing Singapore	
Rasa Sayang Eh	3	シラバス	マレー語
Di Tanjung Katong	3	シラバス、, Sing Singapore	マレー語
Where I Belong	2	ナショナル・デイ・ソング	
Reach Out for the Skies	2	シラバス、ナショナル・デイ・ソング	
Kopi O	2		TV
Chan Mali Chan	2	シラバス、Sing Singapore	インドネシア(マレー)語
Stand Up for Singapore	1	シラバス、ナショナル・デイ・ソング、Sing Singapore	
One People, One Nation, One Singapore	1	ナショナル・デイ・ソング	
Singapore Town	1	シラバス、Sing Singapore	
What Do You See	1	シラバス、ナショナル・デイ・ソング	
My Island Home	1	ナショナル・デイ・ソング	
小人物的心声	1	シラバス Sing Singapore	TV
Dayung Sampan	1	シラバス、Sing Singapore	インドネシア(マレー)語
96° Café	1		トランスメディアドラマ
Little Nonya Serial	1		TV
早安老師	1		中国語童謡
The Lion Men	1		シンガポール映画音楽
If I Had 1 Million	1		シンガポール映画音楽
Singapore Pie	1		新謡作曲家梁文福の曲
I Dream	1		マレー系シンガポール英語ポップス
Sky's the Limit	1		マレー系シンガポール英語ポップス
You Are My Special Angel	1		シンガポールポップス
一人一半	1		中国系マレーシア中国語ポップス
881	1		2007 シンガポールミュージカル、映画ポップス
Under One Roof	1		ポップス系同曲名多数
Phua Chu Kang	1		タミル系シンガポールポップス
Why You So Like That	1		シングリッシュポップス
Oh Mustapha	1		中東ポップス（ディック・リー版）

「シンガポールの音楽」に対する回答では、大学生の回答と同様に上位３曲を「Fried Rice Paradise」「Home」「細水長流」が占めたが、回答数としては大学生では３曲が全て７回答で並んでいたのに対し、教員の回答では「Fried Rice Paradise」が13回答で圧倒的に多く、「Home」が６回答、「細水長流」は５回答となっている。また、大学生と異なる点としては、これら３曲のうち他の２項目においても上位を占めたのは「Home」（「我が国の音楽」では８回答で１位、「郷土の音楽」では９回答で１位」）のみであり、「シンガポールの音楽」として圧倒的支持を

得た「Fried Rice Paradise」は「我が国の音楽」ではわずかに１回答、「細水長流」にいたっては他の２項目では回答なしとなっている。これらの代わりに３項目全てで比較的多くの回答を得た曲は「Singapura」で、「シンガポールの音楽」では３回答で４位、「我が国の音楽」では６回答で２位、「郷土の音楽」では３回答で３位となっている。

マレー語曲、タミル語曲に関しては、「シンガポールの音楽」ではマレー語民謡の「Rasa Sayang Eh」「Di Tanjung Katong」がそれぞれ３回答で４位なのに対して、タミル語曲は全く回答されていない。「我が国の音楽」では大学生同様にマレー語曲「Rasa Sayang Eh」（５回答）「Di Tanjung Katong」（３回答）「Chan Mali Chan」（３回答）とタミル語曲「Munnaeru Vaalibaa」（４回答）が３人以上の回答者に回答されている。「郷土の音楽」に対しては、学生同様に回答が集中する曲は限られていて、「Home」（９回答）「Singapore Town」（５回答）となっており、他は３回答が１曲、２回答が５曲、１回答が25曲と分散している。また、マレー系回答者が３人、インドネシア人配偶者をもつ中国系回答者が１名いたことを反映して、３項目とも大学生の回答と比較してマレー語曲が多く、特に「郷土の音楽」に対してマレー系回答者が様々なマレー語曲を答えているが、４人のあげる曲目自体は重複していないため、２回答以上を得た曲はない。興味深いのは中国系回答者が「シンガポールの音楽」や「我が国の音楽」に対してマレー語曲を回答するのに対して、マレー系回答者は「細水長流」や「小人物的心声」などの新謡の中国語曲は回答していない点である。

表５「我が国の音楽」現職教員の回答

曲名	回答数	公的な位置づけ	備考
Home	8	シラバス、ナショナル・デイ・ソング	
Singapura	6	シラバス、Sing Singapore	
Majula Singapura	3	国歌	マレー語
Rasa Sayang Eh	5	シラバス	マレー語
Munnaeru Vaalibaa	4	シラバス、Sing Singapore	タミル語
Count on Me Singapore	4	シラバス、ナショナル・デイ・ソング	
Singapore Town	4	シラバス、Sing Singapore	
Five Stars Arising	3	Sing Singapore	
Chan Mali Chan	3	シラバス、Sing Singapore	インドネシア(マレー)語
Di Tanjung Katung	3	シラバス、Sing Singapore	マレー語
Stand Up for Singapore	2	シラバス、ナショナル・デイ・ソング、Sing Singapore	
小人物的心声	2	シラバス、Sing Singapore	TV
Semoga Bahagia	1	シラバス	マレー語
One People, One Nation, One Singapore	1	ナショナル・デイ・ソング	
Where I Belong	1	ナショナル・デイ・ソング	
Reach Out for the Skies	1	シラバス、ナショナル・デイ・ソング	
My Island Home	1	ナショナル・デイ・ソング	
Gelang Sipatu Gelan	1	シラバス、Sing Singapore	インドネシア(マレー)語
Burung Kakak Dua	1	シラバス	インドネシア(マレー)語
Dayung Sampan	1	シラバス、Sing Singapore	インドネシア(マレー)語
Fried Rice Paradise	1		シングリッシュポップ、ミュージカル
Bengawan Solo	1		インドネシア(マレー)語
Beauty World	1		ミュージカル（Dick Lee）
Kopi O	1		TV
SARS	1		SARS撲滅シンガポールラップ
The Mosquito Song	1		蚊撲滅シングリッシュYoutube
Sing Our Wishes	1	レイシャル・ハーモニー・デイ　テーマ曲	Youtube等

表６「郷土の音楽」現職教員の回答

曲名	回答数	公的な位置づけ	備考
Home	9	シラバス、ナショナル・デイ・ソング	
Singapore Town	5	シラバス、Sing Singapore	
Singapura	3	シラバス、Sing Singapore	
Count on Me Singapore	2	シラバス、ナショナル・デイ・ソング	
Gelang Sipatu Gelan	2	シラバス、Sing Singapore	インドネシア(マレー)語
Make Courtecy Our Way of Life	2	Courtesy Campaign Song	
Di Tanjung Katung	2	シラバス、Sing Singapore	マレー語
Bengawan Solo	2		インドネシア(マレー)語
Sing a Song of Singapore	1	ナショナル・デイ	
Stand Up for Singapore	1	シラバス、ナショナル・デイ・ソング、Sing Singapore	
Where I Belong	1	ナショナル・デイ	
Reach Out for the Skies	1	シラバス、ナショナル・デイ・ソング	
My Island Home	1	ナショナル・デイ	
小人物的心声	1	シラバス、Sing Singapore	TV
Moments of Magic	1	ミレニアム祝典テーマ	
Dayung Sampan	1	シラバス、Sing Singapore	インドネシア(マレー) 語
天黒黒	1	シラバス	台湾民歌
Rasa Sayang Eh	1	シラバス	マレー語
Selamat Hari Raya	1		マレー語
Menceceh Bujang Lapok	1		マレー流行
Ya Habibi Ali Baba	1		マレー流行
Bunyi Gitar	1		マレー流行
Getaran Jiwa	1		マレー流行
Tiada Kata Secantik Bahasa	1		マレー流行
Ewa Ewa Hari Raya	1		マレー流行
My Colour TV Set	1		シンガポールポップス
Joni	1		シンガポールポップス
Kopi O	1		TV
The Sound of Music	1		西洋ミュージカル
I Live in Singapura	1		Youtubeシングリッシュラップ風
Cublak Cublak Suweng	1		インドネシア器楽曲
Lenggang Kangkong	1		インドネシア民謡
甜蜜的家庭(我的家庭真可愛)	1		イギリス民謡(日本では「埴生の宿」)

（３）「好きな音楽・よく聞く音楽」に対する大学生と現職教員の回答

「好きな音楽・よく聞く音楽」の項目への回答では、大学生、現職教員グループそれぞれで１曲のみ２人から回答された曲があったが、他は全て１人ずつの回答であった。あげられた曲の数は大学生で82曲、現職教員では66曲であった。どちらのグループでも最も多いのは欧米ポップスであるが､回答に占める割合は学生の方がやや多く､学生の回答数の約半数がこのジャンルの曲であったのに対し、現職教員では割合は約４割であった。ただし、現職教員の中に、回答に影響するかもしれない特殊な経験としてマレー伝統舞踊を習っていることを記した回答者と古箏を習っていることを記した回答者があり、彼らが何曲かずつ回答したマレー民謡や古箏の曲が現職教員の回答における欧米ポップスの割合を下げている面もあるため、一般的には両者の差はもっと小さいものである可能性が高い。ポップス以外の欧米の音楽を記した回答には、ミュージカル、ヨーロッパ古典音楽、キリスト教の賛美歌があり、これらを合わせた数は大学生の回答では14曲、現職教員の回答では16曲あった。これはそれぞれの約17～25パーセントを占める数で、グローバル化の波に乗った欧米ポップスの席巻とは異なる、イギリスの植民地時代から引き継いだ音楽文化の遺産をうかがわせるものであるとともに、近年政府が力を

入れている海外の有名なミュージカル公演の誘致や学校音楽教育の中でのミュージカルの扱いの効果であるとも考えられる。

欧米の音楽以外のものとしては、日本や韓国のポップスが大学生の回答には13曲、現職教員では８曲ある。上記の諸ジャンルの曲の他に、大学生の回答では台湾もしくは台湾で活躍するシンガポール人歌手の中国語ポップス８曲が加わり、以上をもって全回答となる。つまり欧米古典音楽の７曲以外はほぼポップス系の回答である。現職教員の方は上記諸ジャンルの曲の他は、台湾中国語ポップス３曲と先述の特別な音楽経験をもつ２名の回答者たちによるマレーやインドネシアの伝統音楽と民謡、中国の古箏の曲が合わせて12曲の他、同回答者たちによるインドネシア、フィリピン、インド、日本の伝統的な曲が１曲ずつ含まれている。これらの特殊な回答を除くと、現職教員の回答においても欧米古典音楽と讃美歌の９曲以外はポップス系の曲となる。

アンケート調査の考察

これまで述べてきた大学生と現職教員の回答結果について、シンガポールのナショナル・アイデンティティー政策に照らして考察していく。はじめに最も顕著なシンガポールの特徴として、どちらの世代の回答にも多数の公的に位置づけをされた曲が多く見られることがあげられる。これらの曲は英語の他に複数言語の歌詞をもつ曲も多く、シンガポール国民の共通性と民族的多様性を意識している。ナショナル・デイ・ソングスの歌詞の内容は、祖国としてのシンガポールへの愛着やシンガポール国民としての国に対するコミットメントを歌っているが、音楽そのものは基本的に欧米ポップス調である。

回答に占める公的性格をもつ曲の割合から見ると、３項目の間で最も公的な性格をもつのが「我が国の音楽」であり、「シンガポールの音楽」「郷土の音楽」の順にその性格は薄くなっていく。そしてその最も公的な色合いの強い「我が国の音楽」への回答において、英語のナショナル・デイ・ソングなどに加えてマレー系、タミル系の曲が回答されている点に、国が建国以来掲げている英語による国民の結束と異なる民族間相互の尊重の理念を、回答者たちが共有していることが現われている。しかしその中身は多少変化していて、教員の回答でマレー系の代表曲として答えられていた大衆的な歌詞の民謡である「Rasa Sayang Eh」は、大学生の回答では国歌の作者による作品であり、「私たちはともに知識を求め、健康に配慮し、友人を尊重し・・・」といった、より国家建設に相応しい歌詞をもつ「Semoga　Bahagia」に取って替わられている。

同じような関係は、「Fried Rice Paradise」と「Home」についてもいえる。先述のようにこれらの２曲はいずれもシンガポールを代表する歌手・作曲家であるディック・リーによって書かれた作品であり、英語の歌詞をもつ。しかしその内容を見ると「Fried Rice Paradise」がシンガポールの民族的多様性を映し出したメニューを提供する大衆食堂を舞台とし、シングリッシュによって大衆の日常的な生活が歌われるのに対して、「Home」の方は政府の言うところの「正しい」英語によって歌詞が書かれており、その内容もどの民族にも共通する、自分の魂の故郷である祖国への思いを歌ったものになっていて、高尚な内容の歌詞である。「Fried Rice Paradise」で使われるシングリッシュは、クレオール文化をもつ人々がクレオール言語にアイデンティティーを感じるように、シンガポールのどの民族にとっても、これこそシンガポール人だけが使う独特の言語として共通のアイデンティティーを感じる数少ない文化的要素の一つであるが、政府はこれを誤った英語であり好ましくないものと考え、その使用をやめさせようと躍起になっている（Ortmann, 2009：36）。よって、「Fried Rice Paradise」はシンガポールの人々

にとって内容的にも言語的にもシンガポール人が共有する文化的独自性が感じられる「シンガポールの音楽」の代表曲なのであるが、政府が決してシンガポールを代表する曲としての権威づけをしないため、回答者にとっても「我が国の音楽」にはならないものと考えられる。

政府による権威づけがなされない場合に、どのような音楽をシンガポール、我が国、郷土の音楽と見なすのかは興味深い点である。公的な位置づけのない曲の回答者は１名ずつの場合がほとんどで、曲としてシンガポール国民が共通して選ぶ曲というものはないが、どのようなタイプの曲が回答されているかを見ることによって人々の考えるシンガポール像を垣間見ることができる。これらのうち中国系、マレー系、インド系シンガポール人の歌手が英語で歌うポップスや、シンガポールで作られた映画やミュージカル、テレビドラマのテーマや挿入歌、デング熱を媒介する蚊やSARSからシンガポールを守ろうという内容の大衆歌謡などには、英語やシングリッシュによる民族の壁を越えた共通性という特徴がある。また、台湾で活躍する中国系シンガポール人の歌手が中国語で歌うポップスは、中国語を武器として中国語圏でビジネス展開するグローバル性という特徴がある。また、３人という少ない回答者数であったため、個人レベルの嗜好である可能性は否定できないが、マレー系シンガポール人がマレーシアやインドネシアのマレー語の音楽に対して持つアイデンティティーも示されていて、ここにも国境ではなく言語や民族によるアイデンティティーの括られ方が現われていた。しかし、これらはいずれもシンガポール人としてのアイデンティティー、中国系やマレー系という民族アイデンティティーにつながる音楽であって、国内の民族間の壁や国境は超えるが、コスモポリタンというアイデンティティーであるとはいえない。

それに対し、「好きな音楽・よく聞く音楽」に対する回答は、まさにコスモポリタンの回答である。そこにはシンガポールの曲は、ナショナル・デイ・ソングスはおろかポップスでさえほぼ皆無であり（大学生の回答に台湾で活躍する林俊傑の１曲、現職教員の回答にシンガポールのイージーリスニングが１曲あるのみ）、英語の歌詞をもった欧米ポップスが圧倒的な存在となっている。そのほかに日本、韓国、台湾などのポップスがある。これらは欧米ポップス文化に影響されたアジアの音楽であり、いわば近代化されたアジアのアイデンティティーに属するものではあるが、シンガポールが引き継いだ中国、マレー、インドの伝統から発展したものではなく、それ以外のアジアの先進工業国・地域の外国ポップスである。よって1980年代の政府が掲げた近代的アジアとしてのシンガポールのアイデンティティーというよりも、自国文化にこだわらないコスモポリタンの回答と取るべきであろう。シンガポール国民を構成する民族の伝統的アイデンティティーを示すものとしては、前述のマレー伝統舞踊と中国古箏の学習者が回答したマレー、インドネシア、中国の古箏の曲があるのみである。

終わりに：シンガポールの事例が示唆するもの

独立以来、シンガポールは、中国系、マレー系、インド系（タミル）という異なる民族の共存を前提としつつ、イギリス植民地時代から引き継いだ英語と西洋近代の価値観を国民共通・共有のものとして、ナショナル・アイデンティティー作りに励んできた。そして1980年代の「新アジア」や1990年代以降の「グローバル」「コスモポリタン」というアイデンティティーは、これらのいずれとも異なる新たな価値を作り出すことにシンガポールのアイデンティティーを見出そうという未来志向のものである。

アンケート調査の結果は、これらの国家によって推進されてきたアイデンティティーをある程度反映したものとなった。回答にナショナル・デイ・ソングに代表される国家による権威づ

けがなされている曲が多かったこと、基本的にナショナル・デイ・ソングは西洋ポップス調の英語の歌であること、「シンガポールの音楽」と「我が国の音楽」にマレー語、タミル語、新謡の曲がサンプルのように含まれていたことからは、国家の作り上げてきたナショナル・アイデンティティーが回答者に浸透していることがわかる。しかしその一方で、「Fried Rice Paradise」と「Home」に象徴されるように、国家による強いコントロールが、本来なら民衆の間に自然に形成されていたはずのナショナル・アイデンティティーの方向性を変えてしまっているのではないかという感も否めない。実際、シンガポールの回答者たちが日常生活で聴くのはシンガポールのポップスではなく、英語の欧米ポップスとなっている。これは筆者が過去に行った日本、タイ、台湾の回答者が日本語、タイ語、中国語の歌詞をもつ自国産のポップスを聴いていたのとは対照的な結果である。シングリッシュが否定され、「正しい」英語で歌われる歌を聴くのであれば、別にシンガポールの曲である必要もないということであろうか。グローバルに活躍するコスモポリタンという現在のナショナル・アイデンティティー政策は、自国の新たな文化を作り出すのではなく、世界の主流文化への同化へと国民を向かわせるのではないかというのが、本稿の小規模なアンケート調査から得た結論である。

付記：本稿は科学研究費基盤研究（C）課題番号25381203「音楽文化のグローバル化と音楽教育を通した国民アイデンティティーの形成」の成果の一部である。

参考文献

Chong, S. N. Y. (1991). *General music education in the primary schools in Singapore, 1959-1990*. Unpublished Ed.D. thesis. University of Illinois at Urbana-Champaign.

Gopinathan, S. and Mardiana, A. B. (2013). Globalization, the state and curriculum reform. In Z. Deng, S. Gopinathan & C.K. Lee (Eds.). *Globalization and the Singapore curriculum: From policy to classroom* (pp. 15-32). London & New York: Routledge.

Koh, A. & Chong, T. (Eds.) (2016). *Education in the global city.* London & New York: Routledge.

Kong, L. (1999). Cultural policy in Singapore: Negotiating economic and socio-cultural agendas. *Geoforum, 31* (4), 409-424.

Ortmann, S. (2009). Singapore: The politics of inventing national identity. *Journal of Current Southeast Asian Affairs, 28* (4), 23-46.

Velayutham, S. (2007). *Responding to globalization*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.